第17号　20円
昭和44年5月25日

内容

現代の課題……1
第9回財団法人評議員会　2
第21・22回大学共同セミナー……4
私の大学生活とセミナーハウス……6
共同セミナー以後……7
千人会第6回報告……8
利用状況……9

# セミナー・ハウス
# SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電話 0426—76—8511～2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京(270)4431
振替口座 東京74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

## 現代の課題

早稲田大学教授　樫山　欽四郎

自然ということが近代社会の最も重要な問題であったといってよい。人間にとっては人間が一番大切なのだから、自然が最も重要な問題であったというのはおかしいと考える人もいるかもしれない。だが、かつて人々が神との関係から人間を考えていたように、近代では自然との関係から人間を考えるようになったのである。そういえば、社会や国家との関係から人間を考えることも近代の重要な関心であったという人がいるかもしれない。それも一応もっともである。が、そういう社会とか国家というものを自然という場で考えたのが近代なのである。

十八世紀までに実を結んだかぎりでいえば、社会も国家も人間もみな自然という原理ないし場を前提として考えられていた。ロック、ルソー、モンテスキューというような人々の考えがそれである。自然という「おのずから」なる場にすべてをかえして、そこからものごとを考え直すということであった。そういうふうに考えられた場合の「自然」が人々の考えていたように「おのずから」なるものであるかどうか、それが問題である。それを詳しくいっている時間はないが、この場合にはそう思われていたのだというよりほかない。しかし、そう思われていた「自然」も実は近代思想がそう思ったかぎりでの自然であって、自然そのものではないし、「おのずから」なるものでもない。自然をそう考えたのがほかならぬ近代思想であったからである。

物と心の対立からものごとを考える考え方がある。この場合物は自然、心は人間とされる。自然は人間に対置され、人間に対して在るものとされる。物は「ひろがり」であると考えられるのだから、幾何学的なものとされる。物が幾何学的なものとされることは、物が幾何学の法則を適用して扱うことのできるものと考えられたことを意味する。そのかぎりで人間は物から自由になり、物を支配することができることになる。物としてこの自然は、人間に対置されたものとして、人間の力の範囲内に引きよせられたのである。だから、「自然は支配」さるべきものとなり、そのかぎりで人間の「知識は力である」ことになる。こうして自然は実験の対象とされる。

その場合考えられるもう一つのことは、物が幾何学的なものとされたのだから、量的に扱うことができるとされたということである。物（自然）は量として数学的に扱うことができるということである。自然は機械観の対象とされたということである。

自然というものをそういう形で考えることがすなわち科学的に考えることであり、それが正しいことだと教えこまれてきた諸君は、それを当り前のことだと思っているかもしれない。だが、大切なことはそれが一つの考え方であるということである。自然を考える考え方は他にいくらでもありうる。

そういう形で自然を機械観的なもの、人間の力の範囲内のものと考える考え方は、人間に対置されたものとしての自然に留まっていたわけではない。この考えは人間や社会や国家を考える考え方にも適用された。人間と社会は自然を考えると同じ考えで処理されるようになった。だから人間と社会のなかに、機械観的合理性に背くものがあれば、それはまちがいであり、人間の迷妄にもとづくとされた。だからそういう迷妄は合理的に処理し、斥けられねばならないとされたのである。

こういう考えが近代のすべてを覆いつくしたわけでもないし、それによって覆いつくされるほど歴史はかんたんなものでもなかった。だから、それに反対する思想もいくつか現われた。目的観というようなものがそれである。けれどもそういう反対論がいくつかあったにもかかわらず、合理的機械観が近代の主流となって十九世紀から二十世紀にかけて、大きな役割を果したことは否定できない。

自然をそう考え、扱うことのなかから技術というものが生み出された。これは初め、かつての道具と大差なかったが、やがてそれ自身独立のものとなっていった。自然の原理をもととして技術的に独立な一つの世界が出来上っていったのである。産業革命以後技術は多くの面でそれ自身の道を歩み始めた。これが二十世紀以後今日にいたって巨大なものとなって実を結ぶようになり、産業革命当時とはまるきりちがった姿をもつようになった。今日では何ごともこの技術から独立ではありえない。技術は多くの恩恵を人間に与えた。だが他方、この巨大な技術そのものは人間の重荷となりつつある。

技術は機械や機械による生産物という形で人間を包んでいるだけではない。人間社会の構造までも技術化してしまった。技術は人間をめぐるすべてのものに、また人間そのもののなかにまでしみこんでしまった。宇宙ロケットは現

（二面につづく）

# 第九回財団法人評議員会
# 新会員五大学の加入を承認

昭和44年3月25日・丸ノ内銀行倶楽部

兼理事会を開催

**報告**＝実り多き一年の業績
**計画**＝初心忘れぬ新規事業
**予算**＝収支合計三、八四〇万円

**●出席者**（敬称略）
茅誠司、上代たの、斎藤勇、佐藤喜一郎、山田良之助、松田智雄、岡田謙、太田敬三、有山登（代）、飯田宗一郎、谷口修、鈴木皇、三輪知雄、升本喜兵衛
評議員五九名のうち出席者四五名（委任状による出席者三五名）

評議員会風景

をもって午後三時半開催。特に今回は新しい試みとして三時より三〇分間を懇談に当て、お互いに個人的な用事を達したり、しばらくぶりでお会いした先生方どうしの話題や、飯田専務理事と個人的にセミナー・ハウスの現況と将来計画などを話し合う時間に費した。

高村評議員会議長病気のため急に欠席されたので、茅誠司館長が議長に指名され、議事に入る。

報告は年九回行なった共同セミナーの成果、一億五、〇〇〇万円募金完了、松下館の落成、自然環境確保のための敷地拡張の運動、昭和四十三年四月九日付で本法人事務所を八王子市下柚木一九八七の一に移転登記をしたことなどである。書けばわずか数行の報告にすぎないが、一法人が約三、〇〇〇万円の決算で赤字も出さずに、日本の大学教育に奉仕できたということの意味は大きいであろう。

数多くの議案が審議され、承認されたのであるが、主なるものは下記のとおりである。大学教育の現状に対処して本法人の一層の前進が期待される。そして開館四年の歴史がいよいよ社会との協力を密接にしていくようである。

**新会員五大学の加入を承認**
上智大学、東京慈恵会医科大学、東京理科大学、東京経済大学、拓殖大学

これで会員校は国立一一校、公立一校、私立二四校、合計三六校となった。新会員校に迎えた五校は、ゼミナールあるいは教師や学生が個人として利用されていたので、当然の加入である。ことに上智大学のごときは多くの先生や学生が企画委員として、奉仕グループの学生として、セミナー・ハウスの事業に参画してもらっているので、同大学の加入は心から歓迎しなければならない。新学長守屋美賀雄先生の教育方針を示すものようである。新会員校の積極的な参加に期待したい。

**昭和四十四年四月より宿泊料、食費合わせて一五〇円の値上げとなる。**

○宿泊料（学生、ユニットハウス）
一泊　五二〇円
○食事代（学生・教師とも）
三食　五八〇円
朝食　一三〇円
昼食　二〇〇円
夕食　二五〇円
○利用料金（宿泊・食費）
学生の場合　一、一〇〇円

**新監事に二学長を推薦**
武蔵工業大学長　山田良之助氏
東京医科大学長　太田　敬三氏

---

（一面より）

在、科学技術の結晶として大気圏に突入しているが、それは同時に国威をあらわす。政治的なものであるということは、それが恐怖の対象でもありうる。人間生活のあらゆる部面にそれがはねかえってくるのである。この事実に象徴されるように、科学技術はすべてを包みこんでしまい、政治も経済も学問もみなその後をついていかねばならないようにみえる。

その一番のもとは、人間の自然に対する考えから発している。科学技術を今日のような形にした前提に近代の政治・経済社会がある。これらを離れて技術だけが独走したと考えるのはまちがいである。これはそういうものを作り出した近代から現代にいたる人間の在り方・考え方に由来するのである。豊かな恩恵を生み出すほどに人間にとって価値あるものが、そのまま人間に対しかぎりない恐怖を植えつける。こういうことを、現代の人々はいまさらのように気づき始めたのである。これは人間の力を信ずる前提から生み出されたのだが、同時に人間の力に対する恐怖と不安を伴っている。人間の力は同時に人間の無力に通じるのではないかということである。

十九世紀後半以後、近代に対する否定の理論が現われてきた。その頃から近代に対する疑いがいろいろな形で語られ、とくに最近になって急速に表に現われるようになった。巨大な科学技術文明に対する不安・否定の声は日々強くなっているが、何人もこれを否定してその外に出ることはできない。それでもそれが不安と恐怖の種であることはなくならない。政治にとっても経済にとっても、それは重荷となっている。それなしには経済も政治も成り立たないが、それが逆に政治を経済を破壊することになりかねない。学問もこの技術化の波の中に翻弄されている。学問自身が技術化されてしまっている。今では学問を学問のもとに立ちかえって、本来学問はどうあるべきかと問うようなことは影をひそめてしまった。政治・経済社会のすべてが巨大な技術文明のなかに入ってしまって、それを外から見ることをしなくなってしまった。それは絶対に動かし難いものとして学問の前にあり、学問はそれを技術的に解明するよりほかに途がないかのごとくである。あらゆる学問が、技術的に微にいり細をうがって、綿密に組織されるようになった。学問はここから抜け出しえないかのようである。

これは東西社会の対立にもかかわらず両者に共通の現象である。この問題からぬけ出すためには、技術化されすぎた学問をもとにかえして、もう一度問い直すことである。今までとはちがった考えに立ちえないのか、これが学問するものに課せられた今日の問題である。

（文責・編集者）

**新評議員に財界人を迎える**

東京電力社長　木川田一隆氏
その他三四氏

建設資金は財界の協力を仰ぎ、三井銀行会長佐藤喜一郎氏を主軸として建設後援会を組織し、募金活動を行なった。第一回、第二回とも理解ある財界人の絶大なる支援を受け、地上に大学セミナー・ハウスが出現したのである。計画完成とともに後援会を解散するに当り、功労者に感謝し、本法人との交誼を継続するため評議員に推薦することを決議したのである。

**土地買収費の借入について**

多摩丘陵の宅地開発が急展し、セミナー・ハウスの敷地一万八、〇〇〇坪ではとうてい現状のような自然環境は長く保存することは難しい。周囲の山林一帯は全く他人の土地であり、いつ宅地造成されるかわからない土地の風景によって、この環境が存在している。とりあえず六、〇〇〇万円の借入を受け、隣接の土地五、〇〇〇坪を買い入れることを承認した。

**寄付行為第二〇条の改正**

従来評議員は四〇名以上六〇名以内となっていた。今回大学以外の財界人（社会人）を評議員に迎えるに当り、人数を六〇名以上一〇〇名以内に改正することとした。

**文部省補助金による**
**セミナー室、宿舎の新建築**

昭和四十四年度文部省予算において、二、〇〇〇万円の補助金が建築のために交付されるに当り、四年間の成果にかんがみ、拡充改善の必要あるものとして、比較的多人数のゼミのための五〇人収容のセミナー室を一室、不足している小グループのための二〇人収容のセミナー室を一室、それに分散して宿泊することの不便な研修者のための三階建一棟二六人収容の宿舎などの新建築を計画している。宿舎、セミナー室を合わせると約五〇〇平方メートル、工費約四、〇〇〇万円の予定である。完成は昭和四十五年三月末となる。

**千人会の会員を増加する方策**

現在三八一人の会員を名実共に一、〇〇〇人にするための方策を協議した。ことに土地買収のための借入金の利子は千人会にたよる以外に方法がないので、千人会員の増加は切実な課題である。経常収入は限定されているし、基本金がわずかに五〇〇万円というこの法人は、大学を思う人々の善意の支援を仰ぎつつ成長するのが本来の姿であろう。

会員校になった機会に、上智大守屋学長他教授学生三〇名が視察のため来訪

**▶協力会員校一覧◀**

〔国立・公立〕
東京大学
一橋大学
東京教育大学
東京工業大学
東京学芸大学
東京農工大学
東京医科歯科大学
電気通信大学
東京外国語大学
お茶の水女子大学
横浜国立大学
東京都立大学

〔私立〕
早稲田大学
慶応義塾大学
日本女子大学
明治大学
中央大学
立教大学
法政大学
青山学院大学
日本大学
東京女子大学
武蔵工業大学
明治学院大学
成蹊大学
津田塾大学
順天堂大学
共立女子大学
国際基督教大学
神奈川大学
武蔵大学
上智大学
東京慈恵会医科大学
東京理科大学
東京経済大学
拓殖大学
東洋大学

**会員校数および学部数**（昭和44年5月調）

| 区分 | 校数 | 学部数 |
|---|---|---|
| 国立大学 | 11 | 35 |
| 公立大学 | 1 | 5 |
| 私立大学 | 25 | 96 |
| 計 | 37 | 136 |

## 寄贈図書

**大河内一男著作集（全巻）**
**大河内一男先生より寄贈さる**

大河内先生は東大総長のときに、本法人の理事として建設を支援された功労者のお一人であるが、開館式、講堂落成式に大学を代表して祝辞をくださったり、いわば本法人の内輪の人である。先生は社会政策を「科学」の領域に高められた経済学者として著名である。今回これまでの著書から主要著作を網羅して著作集が発行されたことは、まだ本格的に健康を回復されていない先生を慰めることであろう。当ハウスの図書館に多数の図書をご寄贈くださったおりに、先生はこの貴重な著作集を加えてくださった。感謝にたえない。

（昭和44年2月～4月）

「日本の労働組合」「社会政策（各論・総論）」「経済学を築いた人々」「自分で考える」「学問と読書」「経済学入門」「日本労働組合物語（明治・大正・昭和）」「私の大学論」「大河内一男著作集（第一・第二巻）」「貧乏物語」「黎明期の日本労働運動」「これからの労働組合」「私の人間像」「職業と人生」「日本労使関係論」「戦後日本の労働運動」「社会思想史」「続社会思想史」「社会科学入門」「世界の名著＝アダム・スミス」「日本的中産階級」　大河内一男殿

「近代イギリス経済史研究」　大河内暁男殿

「神の沈黙」　鈴木　皇殿

「新編『近代』の史的構造論」　松田　智雄殿

「明治の群像1――開国の苦しみ」　林　竹二殿

「日本女子大学学園史二」　日本女子大学殿

「生命の共有」　総山　孝雄殿

「建築構造計画入門」　松井　源吾殿

「悪の話題」「近世日本・庶民社会の倫理思想」　今井　淳殿

「女子の生涯教育」山本　和代殿

「社会学論叢　第四四」　笠原　正成殿

「国際問題」（第一〇七～一〇九）　日本国際問題研究所殿

「大塚久雄著作集」（第二巻）　大塚　久雄殿

主題

# 大学と社会

## ＝現代を考える＝

このセミナーは卒業生を送る餞けの意味をこめて企画されたものであるが、三七一名もの応募者があったので二回に分けて実施した。第一回は主として四年生で編成し、あとの方には在学生にまわってもらった。

このように多数の応募者を数えた最大の原因は、在学中に利用した学生の、最後のセミナーに出たいという強い希望とともに、大学紛争によるものと考えられ、「授業がないから勉強したい」という素直な応募理由が目立った。

〝卒業セミナー〟は昨年につづいて二度目になるが、学問を通じての先生と学生との交わりによるセミナー・ハウスらしい〝卒業式〟ということで、今後の共同セミナーの年間行事として、ぜひ定着させたいものである。

ゲストにお迎えした森恭三氏

# 共同セミナー

## 第21回　卒業セミナーを兼ねて

期日　昭和44年2月22・23日

〈全体講義〉

A　現代の課題
早稲田大学教授　樫山欽四郎氏

B　現代社会と実存思想
中央大学教授　武藤光朗氏

〈セクション別指導者〉

A　自己凝視
早稲田大学教授　川原栄峰氏

B　主体的実存を求めて
東京女子大学教授　小川圭治氏

C　文学のこころ
国際基督教大学教授　小塩節氏

D　東洋思想と西洋思想
国学院大学教授　三枝充悳氏

E　ガンジーとネール
――人と思想――
一橋大学助教授　深沢宏氏

F　数と物と心
上智大学教授　鈴木皇氏

G　現代の民主主義
学習院大学助教授　河合秀和氏

〈ゲスト〉

世界の中の日本
朝日新聞論説顧問　森恭三氏

### 幸あれ！　新卒業生
### 別れを惜しむ送別パーティ

●ゲスト
早大総長　時子山常三郎先生

●司会
日本女子大学　浅岡鏡子さん

第21回共同セミナーは、卒業生のための最後の共同セミナーとなるのを機会に、プログラムの中で彼らを送る送別晩餐会を開いた。いつもながら簡素な中にも食堂いっぱいに人情が溢れ、来賓の山内恭彦先生はクリスマス・パーティよりも今晩のほうが楽しそうだねとほほえまれていた。いつもことあるときには参加してくださる立教大学の久保田きぬ子教授、かつての企画委員であった東大の小城正雄教授も久し振りでこられたし、共同セミナー指導の諸先生を交えてにぎやかな晩餐会を共にした。食後、総長就任後初めてご来訪くださった時子山早大総長が、全大学の代表者のような立場で、学生たちの前途に期待をかけて激励された。各先生のスピーチもおもしろく、ここでなければきけない教訓である。

各セクションが、想を練ったレクリエーションをつぎつぎに披露した。爆笑がつづき、山内、久保田、時子山三先生が審査に当られ、最後に成績が発表された。

この丘を在学中幾度上ったことだろうか。学生たちがセミナー・ハウスの環境に少しも異和感がないほど成長されたのを見ることができたのは嬉しいことであった。

ゲストの時子山先生、司会の浅岡さんを囲んでの卒業生送別パーティ

### 主題の主旨

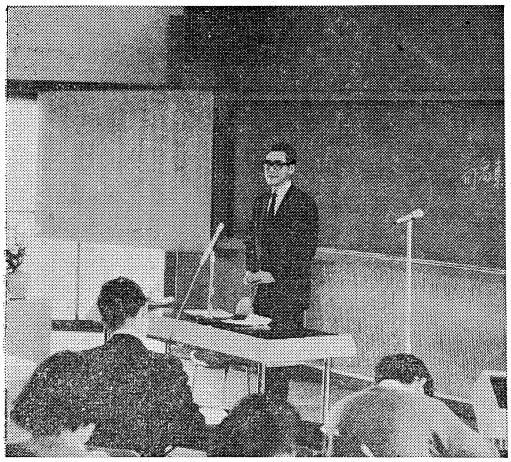
大学はきびしい試練に立たされている。戦後の急速な技術革新と経済成長によって社会は一変し、大学もまた大衆社会に変容した。旧態依然たる現体制に挑戦して変革をもとめているのが大学紛争であるとすれば、教師と学生が対話し、共同生活に参加しながら人間形成と真理の探求のために教育的環境を提供してきた大学セミナー・ハウス四年の歩みは新しい大学像に一つの方向を与えたといってもよいであろう。

主体性と個性を持った人間の形成を期待する大学セミナー・ハウスは、この学年末セミナーにおいて、もう一度人間の尊厳を保持する必要な原理を考える機会を諸君に与えたいのである。ことに卒業する諸君は、教養と余暇が大衆化し、平均化し、機械と人間が共生する社会に出ていくのであるから、現代に生きるため、自分の人間観と社会観を確かめてほしいのである。大学生活の間に一度または数度共同セミナーに参加した学生諸君に対しては、餞けの意味も含まれているので、積極的に参加されることを切望したい。そしてセミナー・ハウスでの先生方との出合いを永遠なものにしてほしいのである。

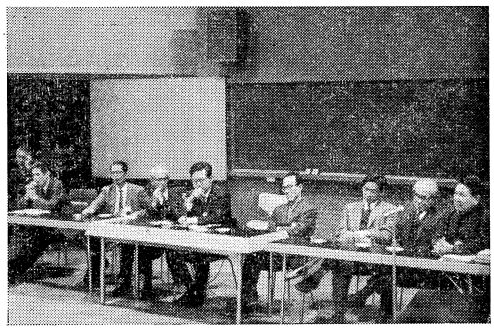
# 第21・22回大学

## 第22回　学生問題懇談会を加えて

期日　昭和44年4月19・20・21日



全体講議の武藤光朗先生



シンポジウムに勢ぞろいされたセクション指導の先生方。山内恭彦、樫山欽四郎の両先生も飛入りで参加された。

〈参加学生〉――第21回――

一二九名（うち女子七一名）

早大（一三）、東京女大（一一）、日本女大（一八）、津田塾大（一一）、青山学院大（六）、上智大（五）、独協大（五）、慶応大（四）、中大（四）、国学院大（四）、都立大（三）、法政大（三）、明大（三）、一橋大（二）、学芸大（二）、東大、教育大、外語大、農工大、武工大、日大、神奈川大、ICU、群馬大、埼玉大、静岡大、信州大、学習院大、玉川大、京浜女大（各一名）。

〈参加学生〉――第22回――

一二四名（うち女子八四名）

東京女大（一九）、日本女大（一八）、津田塾大（一二）、青山学院大（一一）、早大（八）、上智大（七）、立教大（五）、外語大（四）、都立大（四）、慶応大（四）、東京理科大（四）、東大（三）、共立女大（三）、中大（二）、聖心女大（二）、教育大、農工大、学芸大、東京医歯大、法政大、日大、武工大、成蹊大、明治学院大、武蔵大、実践女大、学習院大、東海大、独協大、国立音大、多摩美大、立正女大、関西外語大（各一名）。

### 大学問題懇談会

毎日新聞論説委員　村松　喬氏
東京教育大学講師　鈴木博雄氏

第22回共同セミナーを開催した機会を利用して、大学人の当面している最大の課題である大学問題を中心とした懇談会を行なった。

発題者はこの道の専門家として、言論人としては村松喬、学者としては鈴木博雄の両氏を招いた。それぞれ角度は異なっても話の内容は学生参加の理念と学生の質の問題、参加の領域、教授と学生との対話の条件、大学の改革に必然的に含まれている政治の改革などが中心となり、それに当事者である学生が討論に参加し、活発な意見交換が行なわれた。時宜に適したプログラムであった。

## 大学らしい大学

### 「現代を考える」共同セミナーに参加して

### （I）生田　幹男

拝啓　先の大学共同セミナー「大学と社会――現代を考える」に初めて参加させていただきまして、非常に感銘深く有意義な生活を送りました。現在の数多い大学とセミナー・ハウスを比べて、どちらがより大学らしいかと考えさせられました。それはさまざまな相違にもかかわらず、最も根本的な姿勢において、セミナー・ハウスが本当の大学の精神をそなえているという感慨です。大学の食堂に、授業に出ないでトランプをしている学生がいたとしても、今やそれは不思議ではない。しかしセミナー・ハウスの参加者に、もしもそのような者がいたなら、ただちに帰宅させられることでしょう。このことは規則が厳格だということではなく、学問をする人と学問をする場所にとって、最も大切なことが何であるかを知っているか、知っていないか、それを持っているか、持っていないかという、最も根本的な姿勢に関係していると思われます。セミナー・ハウスの関係者と参加者のすべてが、そうした真の大学の精神を体現していて、より大学らしい大学が武蔵野の丘に実現されているという事実は感動的です。とりとめのない個人的な感想を述べましたが、感謝のことばにかえさせていただきます。

敬具

（東海大学二年――飯田専務理事宛の書簡より――）

### （II）菅沼　きよ子

小学校の教師としての新しい生活が始まったいま、私にとって大学とは何であったか、セミナー・ハウスは何であったかを考えてみました。

大学セミナー・ハウスは経験豊かな先生方の現代についての鋭い分析と豊かな人格に触れる機会を私に与えてくれました。

そして大学のなかでは、ともすれば原点のあたりでプラスもマイナスもわからずに混沌とした時間を過ごしていた私に、人間として真実に生きる姿勢を快い厳しさをもって示してくれました。

（静岡大学教育学科卒業生）

## ▼卒業に際して一言

### （Ⅰ）久保　育子

私が未知のものへの期待と不安のなかで、初めて参加したのは第3回共同セミナー「科学と宗教」でした。八王子で学生生活のしめくくりをしたいと参加した卒業セミナーが、もう第21回であると聞いたとき、大変に驚きました。

四年間にはいろいろのことがありました。なかでも七大学一〇人の先輩たちと、半年余りかかって企画した第6回共同セミナーは私の大学生活に大きな位置を占めております。津田塾大、東京女子大、日本女子大の学生で幾百かのおにぎりを用意した一周年記念式典等々。精一杯できることをするというのがセミナー・ハウスでの私でした。自信喪失のひ弱な私にさえ、そうしたやる気を起こさせるのは飯田先生の「若い魂」の不思議です。ただ一つかなえられなかったこと、それは八王子の丘で自分を見つめる数日を送りたいという願い。学生には三日以上の滞在費用は準備できませんでした。「臨済録」の内表紙に川原栄峰先生からいただいた一言。「くぼさん、力をつけよ！」「はい」。

（日本女子大学社会福祉学科卒）

### （Ⅱ）重森　寿

私がセミナー・ハウスを知ったのは、大学一年の秋遅く、学内の教授学生交歓会に参加したときです。奇妙な建物を珍らしがり、環境・設備のよさに驚き、さらにこれらの施設が飯田先生をはじめとする多くの人々の善意によって創られたことに感激するとともに、尊敬の念を抱かざるをえませんでした。このときを初めに共同セミナー、種々の行事、合宿などでたびたび八王子にかよい、大学では得られない多くの経験をしました。その一つはテニスの道具小屋を作るため、ほんのちょっと（本当にほんの少し）山を削ったときのことです。このときブロックの石運びをやって、初めてユニットハウスに行く道に敷かれてある石が大変な努力の結果であることに気づきました。セミナー・ハウスを訪れるたびに少しずつ何かしら変わっています。その変わり方は何気ないのですが、実はそれは大変なことだと思いました。

私が共同セミナーに参加するたびに思ったことは、あまりにすばらしいセミナー・ハウスに自己の足元をすくわれずに、そしてセミナー・ハウスは大学の代わりとしてではなく〈自己の大学〉の、さらに上に置くようにしなければいけないということです。

（早稲田大学法学部卒）

### （Ⅲ）馬場　孝悦

「ゴ　ソツギ　ヨウオメデ　トウ
ゴ　ザ　イマス　スギ　ナノオカ
アサマニマモラレナガ　ラモウツ
クシガ　スクスクトノビ（中略）
イヨイヨコレカラデ　スネ」

卒業式の日に友よりもらった祝電です。「スギナノオカアサマ」は単に親のみでなかったことを感じます。大学生活については、大学とセミナー・ハウスをあげることができます。この二つは一体としてとらえざるをえません。もし、どちらかだけしか知らなければ、私の大学生活の意義は今ほどにはなかったでしょう。

もう一つ私にとって貴重な体験は、学内のセミナー運動でした。新歓セミナー、全学セミナー等をわれわれの手で実現させたこと、それらの運動を通じて数多くの先生や友人と知りえたことでした。

私は大学時代を「生きていた」といいきることができます。あの八王子の丘の上で。

（武蔵工業大学経営工学科卒）

### （Ⅳ）浅井　義博

大きく揺れ動く現代に生きるわれわれは、ときに自分を見失う。あまりの動きの早さに幻惑され、その日のことに追われ、自己および社会を省察することなく生活しているのは社会人だけではない。

学園生活においても、増加したカリキュラムの消化や活発なクラブのためにわれわれはともすると追っかけられた毎日を送りやすい。加えて実利的というか、即物的というか、ショートランに見て役に立ちそうな学問が好まれる風潮に影響され、根本的な問題に触れる機会が減っている。

こうしたなかにあって、セミナー・ハウスを日頃チャンスの減った根源的な問題に携わる場所として私は位置づけてきた。

各大学から、しかも種々の専攻の学生が集まる大学共同ゼミは、セミナー・ハウスならではもつことのできないものです。各自の分野や観点がちがってもなお共通に論じあえる対象に向かえるという自然のなりゆきが、われわれを人生の根本問題に向かわせるのに役

（七面へつづく）

セミナー・ハウスは教師と学生の出会いの丘である。学生個人にとってはまたとない貴重な出会いとなる。

ここに一つの例をあげよう。今春卒業した学生たちの中で、津田、明治、早稲田の学生四名から、大学を去るに当たって、どうしても南原繁先生にお別れの挨拶をしたいからその機会をつくってほしいという申し出を受けた飯田専務理事は、南原先生のご好意を仰いで学士会館でお目にかかっていただいた。彼らはセミナー・ハウスの共同セミナーで南原先生の特別講演を聞き、昼食をご一緒にした経験をもつ学生である。学問と人生に深い理解を持たれる先生と、一時間余りにわたって新渡戸稲造先生のこと、「橋のない川」の映画のことなど、永遠の記憶に残るお話を聞くことができた。大講堂の卒業式は盛観ではあるが、全人的な接触の中で行なわれるこのような小さな卒業式の持つ意味は大きいであろう。

# 共同セミナー以後
## ——「Fの会」のこと——

専修大学教授　今井　淳

私がセミナーのチューターに加えさせていただいたのは、昭和四十一年一月の「第3回セミナー」でしたから、開設後まだあまり日がたっていない頃でした。先日ひさびさにハウスを訪れたところ、快適な教師館や図書館、舗装された散歩路や立派な売店などといった設備や新緑の美しさにびっくりしました。その頃はちょうど冬のさなかで路はドロンコ、記念樹はまだ数多くはありませんでした。昔と変わらないのは、いつもハウスに熱情を傾けていられる飯田先生や、親切な事務職員の方々のサービスですが、さて、当時担当したのがFセクションの一八名の学生諸君たちです。連日夜中の二時過ぎまで討論という活気のあるゼミが終了したとき、誰いうとなくこれを機会に、今後も集まろうということになり、年に何回かの読書会やそれぞれ専攻分野の研究発表会、あるいはなつかしのセミナー・ハウスでの合宿や毎年の忘年会などが始まりました。そして名前もいつのまにか「Fの会」ということになりました（もっとも、その後セミナー・ハウスが大発展して多くの共同セミナーが開かれていますから、正しくは「3Fの会」ということになりましょう）。その当時は大学一年生だった諸君諸嬢も、今年で全員卒業で、それぞれ社会に巣立ち、また当時大学院クラスの諸君のなかには、結婚・出産というおめでたもあり、研究者としての道を歩んでいる者もあれば、海外留学中の者もあるというように、お互いにずいぶん環境が変化してきました。

したがって、集まり方も初期の読書会的・研究会的方向から、コンパを中心にお互いの経験を語り合うという方向に移ってきたのは当然ですが、正直なところ、私としてもセミナーをご縁にできたこの集まりが、果たして何回つづくやらと思っていたところ、もう三年余りもたちました。現在でも会のときに、わざわざ地方からつどうをつけて参加してくれる諸君もいるし、いちおう「先生」である私も今では安心して？　社会人である諸君と一緒に酒盃をかたむけることができるという次第。

「セミナー・ニュース」を拝見していますと、いつも参加された学生諸君の、楽しかった数日間の思い出が語られていますが、その楽しさはただ数日間だけで終わるものではありません。お互いに専攻の異なった人々が接触し、学生時代とはまたちがったピチピチした新鮮な感覚で、実社会での具体的な問題に取組んでいる若い諸君の、真剣な話を聞くことができるのは、私にとってもメンバーにとっても、自己の視野を広げ、柔軟な思考をつくるうえに、ずいぶん役立っています。さいわいにも当時のFセクションには、東工大の大学院のM君やN君など、熱心な諸君諸嬢が世話役になってめんどうな連絡やそのほかの雑事のサービスをしてくれているおかげで「Fの会」ができたわけです。この会も今春で全員卒業という一区切りの時期を迎え、今後どういう形になるかわかりませんが、会合があれば私もできるかぎりひまをみつけて出席し、話を聞きたいものと考えています。

大学セミナーに参加された学生諸君の、いろいろなグループもほかに数多くあると思いますが、一つの例として「Fの会」のことを紹介しました。こういったこともセミナー・ハウスの役割の一つではないでしょうか。

当時のFセクション

（六面より）

立っている。現代の最も重要な問題に関与する場、それがセミナー・ハウスといえよう。

（早稲田大学政経学部卒）

### （V）百瀬　敏昭

大学セミナー・ハウスは創立四周年を迎えます。まずは最初の卒業生なのでしょうね。無事に、平穏に、それどころか輝かしく。

どうですか、このへんでセミナー・ハウスを本当の卒業——つまりお払い箱にしては？　この四年間、十分に先駆者としての役割を果たしましたよ。いつまで、ここをユニークな存在にしておくつもりなんですか？　いつまで大学人にとってかけがえのない場にしておくつもりなんですか？　教授と学生が親しく対話できる最適の場……妙なことです。そんなことは本来大学の場で日常行なわれていなければならぬこと、セミナー・ハウスは大学間の交流でも計る補助的な所であればいいんですよ。

しかし、貧しさ——ええ、いろんな貧しさ、人の心の、努力の、物質的な——は、大学の現状をそれほど遠くしています。大学セミナー・ハウスは現在施設だけではなく、それを中心とする人々の善意と、熱意と、知力の和としてなっているきわめて精神共同体的な存在でもあるのです。だから僕にとっても、一つの心の拠り所でありましたし、これからもそうあることでしょう。

本当は、大学セミナー・ハウスはユニークな存在をやめるどころか、もう一つ新しい成長をとげるにちがいないのです。そんな再生の区切りとして、セミナー・ハウスのこの四年間の終わりは、やはり「卒業」であってほしいのです。

（上智大学経済学部卒）

### （VI）古賀　良子

緑、目にしみるような若葉の色、その青さが増してくるにつけ、セミナー・ハウスのあの丘を懐かしく思い出します。あの日植えた苗はもうどれほど育ったのかしら？　あの木は、あの花は？　ほんの一ヵ月ほど前に卒業し、教職についたばかりなのに、もうセミナー・ハウスを客体として思い出している自分が腹立たしく思われます。でもその思い出は単なる感傷ではなく、もっと力強いものです。

生徒の真剣な顔、混りけのない瞳を見ていると責任の重大さともすればおしつぶされそうになりますが、それ以上にあたたかい喜びが心の中にわきあがってきます。生徒と先生というのではない、人間と人間のぶつかりあいです。ときには迷いためらいます。

でも私は思います、人は信じられるものなのだ、信頼があればどんな困難も克服できるのだと。

それを力強く教えてくれたセミナー・ハウスに、感謝の気持でいっぱいです。

（津田塾大学数学科卒）

第一部の出版祝風景

●期日　昭和44年4月27日

**第一部　お祝い**

●司会　上智大学大学院　長島　正君

共同セミナーのセクションで鈴木先生の指導を受けた学生、セミナー・ハウスの諸行事で同先生と交わりを結ぶようになった学生、いわば親しい人々がセミナー・ハウスの企画に賛同して集まったのがこの会である。約四〇人が同先生を囲んで著者ティーリケの思想と人物についてお話を聞き、その後お茶の会をはさんで出席者全員が自己紹介をされると、鈴木先生と出席者とを結びつけるためにセミナー・ハウスが果した役割がしだいにはっきりとし、出会いというものの不思議さをしみじみ考えさせられた。

最後に飯田専務理事が、出席者の心を合わせて用意したお祝い品を、同先生のご夫人と家族に贈呈された。先生からは広重の版画をセミナー・ハウスにご寄贈いただいた。物理学者である鈴木教授がこの日ばかりは祝福された一人のクリスト者であった。それが本当の鈴木先生なのであろう。

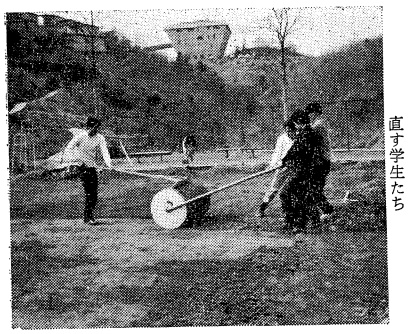
**第二部　セミナー**

セミナーの鈴木先生

同夜「神の沈黙」をテキストとしたセミナーが引き続いて行なわれ、鈴木先生を交えて、われわれの置かれている状況でのかかわり合いということ、また神の呼びかけといった信仰の核心に触れる問題について深夜まで話し合った。

## テニス・コートの修復
## 作業に奉仕グループの学生が協力

昨年六月オープンしたテニス・コートは、夏・秋を通じて勉強の合い間に楽しむ学生たちによって大いに活用されたが、冬の間、霜や雪でかなり痛んだ。スポーツ業者に依頼すると約一〇万円の費用がかかるという。そこで奉仕グループの学生が春休みの残りを返上して作業に協力してくれた。四月三日から一週間、延べ三〇名を動員し、それに職員も加わって作業が行なわれた。すっかり整備されたコートは、今年もゼミナールの学生たちに利用されている。若葉の向こうに早朝から快よいボールの音が聞こえ、セミナー・ハウスのキャンパス風景を健康的にしている。


一生懸命にテニス・コートを直す学生たち

## 施設拡充資金寄付者
（第9回報告、昭和44年2月14日）

| | |
|---|---|
| 一〇、〇〇〇円 | データプロセス　安藤多喜夫殿 |
| 一、〇〇〇円 | 法政大学自由主義研究会殿 |
| 一、〇〇〇円 | 立教大学G・F・S殿 |
| 一、五〇〇円 | 専修大学今井ゼミ殿 |
| 二〇、〇〇〇円 | 日本航空電子工業殿 |
| 五、〇〇〇円 | 慶応義塾大学高村ゼミ殿 |
| 三、二〇〇円 | 電気化学工業殿 |
| 三、三〇〇円 | 東京大学藤原ゼミ殿 |

### 特別指定寄付

〔植樹〕

| | |
|---|---|
| 九、〇〇〇円 | 第二一回大学共同セミナー殿 |
| 七、〇〇〇円 | アスター精機殿 |
| 二、〇〇〇円 | 日本印刷技術協会殿 |
| 一〇、〇〇〇円 | 雲気化学工業殿 |
| 五、五六〇円 | 第二二回大学共同セミナー殿 |

〔図書〕

| | |
|---|---|
| 三、〇〇〇円 | 中本直美殿 |

## 千人会
### 第六回報告

A＝年額　一〇、〇〇〇円
B＝年額　五、〇〇〇円
C＝年額　三、〇〇〇円

| | | |
|---|---|---|
| C | 萩原印刷所店主 | 萩原　弘殿 |
| A | 三井銀行検査部参事 | 前田　喜平殿 |
| B | 成蹊大学教授 | 武田　昌輔殿 |
| B | 大学セミナー・ハウス職員 | 土橋　清殿 |
| C | 専修大学教授 | 須田豊太郎殿 |
| A | 株式会社内藤商店取締役 | 内藤　嘉保殿 |
| B | 二松学舎大学教授 | 佐古純一郎殿 |
| C | 専修大学助教授 | 一柳　富夫殿 |
| C | 東京芸術大学助教授 | 小泉　文夫殿 |
| A | 日本商工会議所会頭 | 足立　正殿 |
| B | 専修大学教授 | 松元　三郎殿 |
| C | 東京医科歯科大学名誉教授 | 藤野　登殿 |
| C | 日本女子大学助教授 | 岡田　正弘殿 |
| B | 東京工業大学大学院学生 | 宇川　和子殿 |
| C | 東京工業大学助教授 | 長松　昭男殿 |
| C | ELEC専務理事 | 山田　圭一殿 |
| C | 竹内書店営業部 | 高橋　源次殿 |
| | | 村田　和巳殿 |

## 43年度　利用のあらまし

（昭和43年4月～44年3月）

### 〔A〕大学別利用回数調

1　東京都立大学　五七回
2　早稲田大学　五四回
3　慶応義塾大学　三〇回
4　法政大学　二五回
4　東京工業大学　二五回
5　東京大学　二四回
5　立教大学　二四回
6　中央大学　一九回
7　明治学院大学　一八回
8　一橋大学　一七回
8　青山学院大学　一七回
9　東京学芸大学　一五回
10　成蹊大学　一四回

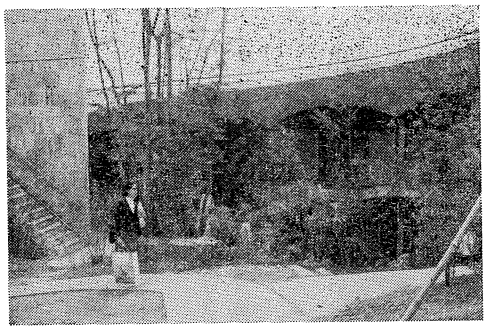
### 〔B〕教官別利用回数調

6回　立教大学教授　久保田きぬ子
5回　早稲田大学教授　川原栄峰
　　明治学院大学助教授　増田茂樹
4回　東京工大教授　益子正己
　　東京工大教授　松田武彦
　　早稲田大学教授　吉阪隆正
　　法政大学教授　栢野晴夫
　　明治大学教授　河野一英
　　成蹊大学教授　安藤英治
3回　東京大学助手　平川祐弘
　　一橋大学教授　石田　忠
　　東京工大教授　川喜田二郎
　　都立大学教授　関　嘉彦
　　都立大学教授　鈴木二郎
　　都立大学教授　清水　誠
　　都立大学助教授　湯浅欽史
　　中央大学助教授　笹原昭五
　　慶応大学助教授　池井　優

## 松下館の利用好調

昨年十二月開館した松下館は予想に違わず好評で、これまでのべ四一九人の利用者を数え、教師館としての機能を十分に発揮している。

八室満員の日は十二月に六日、一月に三日、二月に四日、三月に四日、四月は七日であるが、東京農工大大野泰雄教授、都立大学鈴木二郎教授、同関嘉彦教授などはご自分の研究のまとめや論文書きなどに数日は滞在する愛用者である。



青葉につつまれた松下館（教師館）

昨年御殿場市の寄贈を受けて富士山麓から移植した富士桜は見事に根がつき、春の訪れを忘れずこまかい花が中庭一面に咲いてくれた。やがては富士桜の名所になるであろう。

青葉の候ともなれば個人やゼミナールなどから寄付された大小の木々の若葉がことに美しく、宿泊する先生方はこぞって静かな環境を賞讃している。

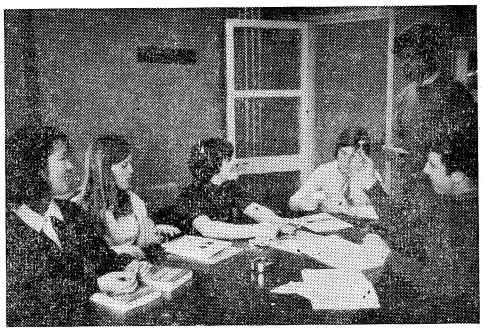
## 利用状況

◆二月

日野自動車工業（管理者研修）
東京大学比較文化研究室　平川　祐弘
青山学院大学教授　神山　妙子
早稲田大学教授　川又　昇
早稲田大学助教授　桧田　信男
青山学院大学教授　春木　猛
東京学芸大学助教授　斎藤　耕一
砧教会　西村　俊昭
上智大学教授　岡田　純一
目白学園女子短期大学助教授　中山　昌
法政大学助教授　霜島　甲一
白梅学園短大助教授　井手　則雄
東京教育大学助教授　市川　正己
早大理工学部科学者文化研究会　尾上　護
法政大学講師　竹内　真一
明治学院大学助教授　深沢　実
早稲田大学講師　古川　栄一
青山学院大学教授　鈴木　二郎
早稲田大学講師　高村　新一
東京大学教授　笹原　昭五
明治大学ゼミナール連合協議会　唄　孝一
早稲田大学教授　坪内　和夫
松下電器産業（研修会）　河野　一英
明治大学講師　土生　長穂
法政大学助教授　石　弘光
一橋大学講師　上智大学カウンセリング研究会　二神　恭一
早稲田大学助教授　早坂泰次郎
立教大学教授　久保田きぬ子
立教大学教授
立教大学旅行研究会
慶応義塾大学中国研究会　栢野　晴夫
法政大学教授　深見　章
慶応義塾大学フランス語会　依田　精一
日本大学教授　増田　茂樹
東京経済大学助教授　高橋　恒郎
東京経済大学経済政策研究会
東京教育大学助教授
明治学院大学
東京経済大学ユネスコ同好会
お茶の水女子大学教授　亀谷　俊司
ルーテル英語学校教授　ウォルター・ハームス
茨城県立結城第一高等学校　杉沢　新一
立正大学助教授　加藤　一郎
早稲田大学教授
三井物産トールサービス（社員研修）　石川　与吉
立正大学教授　川喜田二郎
東京工業大学教授　立石　竜彦
明治大学教授　中村　孔一
学習院大学助手　長谷川幸男
早稲田大学助教授

◆三月

東京女学館短大講師　渋沢　紀子
中央大学助教授　笹原　昭五
東京都立大学教授　唄　孝一
東京都立大学教授　清水　誠
青山学院大学美術部
法政大学助教授　白井　慎
成蹊大学教授　赤松　則夫
青山学院大学助教授　関田　寛雄
日本女子大学助教授　古沢　頼雄
日本女子大学アジア研究会
京王帝都電鉄（課長研修会）
東京大学教授　松尾　孝嶺
上智大学助教授　吉田　裕
中央大学教授　高窪　利一
早稲田大学生産研究所　長谷川幸男
立教大学助教授　室　俊司
日本ムーディ科学映画委員会
東京工業大学大学問題研究会　川喜多二郎
東京女子大学助教授　笹本　至心
日本大学教授　三戸岡道夫
近代労研（リーダーシップ講座）
東大柏蔭舎聖書研究会　西村　秀夫
データプロセス・コンサルタント
東京都立大学教授　野間　三郎
白梅学園短期大学教授　田中　未来
都立商科短期大学〝考える会〟　長田　光展
日野自動車工業（研修会）
共立女子大学国際問題研究部
法政大学教授　長谷川　博
都立商科短期大学講師　長田　光展



日本語の勉強のため二週間滞在したAFSの米高校生（松下館セミナー室）

埼玉大学助教授　田中　一盛
政治経済史学会続日本紀研究会
東京都立大学助教授　湯浅　欽史
東京都立大学助教授　太田　秀通
早稲田大学教授　新沢　雄一
東京工業大学教授　松田　武彦
早稲田大学講師　戸沼　幸市
東大比較文化研究室　平川　祐弘
法政大学教授　西島　梅治
国際商科大学講師　加藤　良三
京王帝都電鉄（課長研修会）
東京都立大学教授　保坂敬太郎
日本聖公会学生キリスト教運動関
東地区　速水　敏彦
東京キリスト教短期大学（教職員研修会）
聖和教会学校（教師研修会）
政治経済史学会信長公記研究部会
東京都立大学助教授　長倉　康彦
成蹊大学教授　木村　久男
職業訓練大学校
大学美術連盟（研修会）
松本享英語教育研究会
アスター精機（インストラクター養成）
アジア・アフリカ総合研究会
日本大学教授　武藤俊之助
早稲田大学生産研究所
法政大学二部歴史学研究会
AFS日本協会（日本語教育）
武蔵工業大学理工会（リーダースキャンプ）
シェークスピア劇公演　児玉　久雄
東京音楽大学助教授　南　弘明
日本バプテスト同盟婦人部
法政大学教授　田中　直吉
独協大学講師　長嶋　善郎
全日本学生憲法会議
国立音楽大学教授　熊谷　孝
東京都立大学助教授　小池　滋
東京大学教授　松田　智雄
青山学院大学教授　福岡　博之
早稲田大学貿易学会
しゃかもどき研究会
独協大学講師　宮川　淑
亜細亜大学英会話研究会
東京経済大学文化会
立教大学GFS
独協大学教授　四宮　満
学生YMCA関東連盟　藤森　元
専修大学助教授　望月　清司
青山学院大学教授　久保　欣哉
法政大学不動産鑑定研究会
独協大学講師　高橋　正男
法政大学建築研究会
産業関係研究協会
日本WFA　前田　陽一

◈四月

東京大学助教授　鶴藤　丞
独協大学講師　宮川　淑
慶応義塾大学講師　飯吉　厚夫
立教大学ミッチェル館
日本印刷技術協会（社内研修）
専修大学哲学会　今井　淳
法政大学教授　青木　繁
一橋大学教授　金子　幸彦
日本航空電子工業（採用社員研修）
東京医科歯科大学助教授　藤森　岳夫
慶応義塾大学助教授　西川　俊作
明星大学写真部
知覚コロキュウム
拓殖大学英語研究会
一橋大学教授　南　博
慶応義塾大学助教授　村田　昭治
東京農業大学華道部
東京女子大学助教授　黒星　瑩一
成蹊大学教授　武田　昌輔
日本女子大学文芸部
慶応義塾大学助教授　内山　秀夫
東京工業大学助教授　椎貝　博美
日本女子大学助教授　古沢　頼雄
武蔵工業大学講師　村田　裕
上智大学「資本論」研究自主ゼミナール
日本キリスト教協議会（青年指導者協議会）
学習院大学教授　柏倉　俊三
東京女子大学教授　高田洋一郎
慶応義塾大学教授　高村　象平
明治大学教授　春日井　薫
慶応義塾大学教授　石坂　巌
一橋大学経済研究会
日本同盟基督教団
京王帝都電鉄（次・課長研修会）
電気化学工業（新入社員教育）
富士観光（新入社員教育）
明治大学助教授　中村美智夫
慶応義塾大学講師　飯吉　厚夫
横浜国立大学助教授　大藪　俊哉
法政大学教授　尾形　憲
一橋大学ワンダーフォーゲル部
独協大学教授　林　俊一
順天堂高等看護学校
中央大学教授　岩尾　裕純
慶応義塾大学助教授　池井　優
韓国キリスト者友和の会
東京大学講師　高橋　三郎
東邦大学（新入生オリエンテイション）
光印刷（勉強会）
社会科学研究会（個人サークル）
慶応義塾大学講師　長島　昭
慶応義塾大学助教授　白井　厚
一橋大学教授　小島　清
立教大学教授　神島　二郎
東京大学講師　渋谷　博
国際基督教大学ギター部
慶応義塾大学教授　遊部　久蔵
東京大学教授　藤原　鎮男
明治大学教授　吉弘　芳郎
青山学院大学教授　天利　長三
東京工業大学教授　内藤　正
東京農工大学助教授　金子　六郎
オルタンシアの会　芳賀　徹
明治大学教授　内田　章五
東京女子大学教授　白井　常
玉川大学教授　戸川　尚

## 専務理事ノート

クサビ型の本館が若葉の中にそびえている。萠えるような若葉の美しい自然をブルドーザーによって破壊するのが宅地開発という無秩序な都市化である。大学論を展開するよりも、大学紛争解決の立法化よりも、静かに考える環境をつくるために予算を出すことを考えるほうが政治の任務ではあるまいか。毎日新聞の余録氏は再度そのことを強調してくださっている。

美しい自然の丘には美しい心が集まる。そこには美しい話が生まれる。津田塾卒の高校教師Nさんは俸給の初穂を送ってくださった。彼女の心の中にセミナー・ハウスで学んだ協力と参加の精神が育ち、具体的行動となったのであろう。感謝するとともに私は深い敬意を捧げながらいただいた。

「中央公論」六月号の永井道雄教授の大学論の論文でセミナー・ハウスが評価された。このセミナー・ハウスが Inter University Study Center であるように、利用される先生方や学生諸君の協力を切望したい。

今年は新たに会員校として五校が加入された。友を迎えることはうれしいことである。日本の大学教育の進歩改善に参加していただけるからである。